

特260

664

三井寺

昭和改訂版
内十六



始



三井寺

〔梗概〕駿河國清見が關の女、一人の子を持ちしが、誘拐かされて行方
 不知なり。或る夜、靈夢に、我子
 三井寺へ参れとの御告あり、頃しも八月十五夜の月明
 かり、何きも講堂の庭より出でて月を賞しけるに、女物狂ひ
 狂の古車も引いて、我れにも許せと狂ひ廻り撞き鐘の聲毎に説法の意味
 深き所以を説き、更に、鐘の古車数々述べけるが、やがて尋ぬる我子
 の稚兒となりぬたるに再會してめでたく故郷に歸り富貴の家となりぬ。



公みづぐふたの事を我の物もねふよねい
 象ふぐう理ありあの多難や言おたな
 も親子此別来る知物を備してや人の親
 としていとおしと音つる子此は清
 をも白糸乃 礼きむやねふらん カケリ
 都の秋を控て控る 月見ぬ里はすみ ヤラハ

やあし海とさてう人のわらあなも
 紅葉も月も音も古く母象子のあな
 らば田舎もすなよう海としま古く
 胸もいさ古くに胸らん帰れさる波を
 志賀の奈崎の松みとま子のたぐひあ
 松風も言らん松風も今はいとら

けそいさむのづらゝ船もあつれて出でん船
 人といふもききしんあゝ面白の鐘れ

音やあゝあかむの帯の清見寺の鐘
 古寺鐘にあまの昔のふらゝあゝあゝ
 誠やけ鐘も秀々となん人の龍女より

取りて海りー鐘るれ龍女が成佛の縁
 子似せてあゝも鐘をつくべきなり

同原野ニイカサウニトニニニニニニニニニニニ
 弓上 新ハはるゝ楽あま〜〜月めを
 鐘ハさ〜ぬ〜ん〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

中〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 樓子也〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

煩惱の夢をさばはまや法のなるも静よ先
 初來此鐘をうく時を 諸行を常とひ
 くを 後來の鐘を法く時ハ 生滅
 法とひくあり 晨朝乃無常ハ 生滅と云
 入相ハ 寂滅 為樂と寫きて菩提の乃
 乃鐘のなる月も教そひて 百八於悩の睡

乃響く夢のあは鐘ひともおしきたりや
 後來の鐘よ我もみ鐘の雲晴て真如
 若月此衆を能めおもくぬさん 上 吏
 七樂此鐘のなる花のあよおぬ 又
 龍池の柳乃まある 日 中 に 涼
 上 其 外 愛 にも せ 此 人 祠 の 林 乃 久 福 也

きく 日 名も高砂の尾上乃鐘 曉りき
て秋乃雲くもる月も籠白の初津も
きく 難波寺 名新多支鐘乃おと

おぬや法のあゝん 山寺のまはた
をまてんれいおの鐘よ ちちん
実かーめだあふあはまのあゝん 其

卯曉の妹春を惜むなごれ恨をそふ
時乃清もと枕乃鐘やびくゝん 又待首
乃更抱く鐘のあきけいありぬ別きを
かーむ鳥の抱ういと詠せーも 意強きた
よきの音伝のあうと実物をい又い老らく
此痛覺程ふあ古へを 今思ひ祿のあふ

おも^ヤ海^ノ心^ノ乃^ハ淋^シと^ハふ^レけ^テ鐘^ノ乃^ハ津^ノく^ハこ^ト
 思^ハひ^ハも^トん^ノの^ハ感^ハあ^ハら^ハし^ノの^ハ時^ハよ^ク統^マま^ス
 上^レて^ハ月^ノ落^キ鳥^ノ啼^キて^ハ霧^ノ天^ノよ^ハほ^クこ^トま^ス
 江^ノ村^ノ乃^ハ漁^ノ火^も不^レの^ハう^に半^ハあ^ハれ^テ鐘^乃ひ^び
 だ^ハら^ハ家^ノ乃^ハ舟^もや^ハ通^ハか^ハん^ノ蓬^達窓^もあ^ハら^ハり^ト
 たり^テあ^ハま^キ一^ハ汐^浜の^ハ楫^枕浮^輪ぞ^り

一^ハは^ハは^ハ海^ノと^ハ風^も静^マて^ハ秋^ノ夜^に
 月^もこ^ト井^ノの^ハ鐘^ぞあ^ハら^ハり^ト
 う^らい^ハお^ハね^ハの^ハあ^ハま^ハら^ハぬ^ハ人^と
 お^もい^ハあ^ハら^ハ我^子を^ハ作^ルし^ク
 中^ノへ^ハ車^のの^ハ何^事も^なら^ズ也^ト
 物^ね乃^ハ國^里を^ハい^ハて^ハあ^ハら^ハり^ト

今^ルの^ル河^ハを^カは^シも^トは^シた^ルあ^ノ後^ノ河^ノ國^ニ
 清^ク見^ルる^る國^ノの^者あ^リ—^ク人^あま^し人^のあ^はふ
 渡^り今^ハは^キす^よあ^らみ^らう^ら母^上あ^はを^をる^ね
 流^ひく^くあ^らみ^らう^ら出^立た^るあ^らみ^らう^ら
 家^をあ^らみ^らう^ら又^もあ^らみ^らう^らあ^らみ^らう^ら
 車^あの^あら^みら^うあ^らみ^らう^らあ^らみ^らう^らあ^らみ^らう^ら

見^ルる^る家^ノ娘^ノ—^カの^カあ^らみ^らう^らあ^らみ^らう^ら
 昔^子乃^おも^てあ^らみ^らう^らあ^らみ^らう^ら子^なあ^らみ^らう^ら
 よ^ふあ^らみ^らう^らの^あら^みら^うあ^らみ^らう^ら人^目も^思は^れた^あら^みら^う
 あ^らみ^らう^らの^あら^みら^う乃^は車^や余^は目^も思^はれ^たあ^らみ^らう^ら
 流^れた^あら^みら^うあ^らみ^らう^らあ^らみ^らう^らあ^らみ^らう^ら
 今^もあ^らみ^らう^らあ^らみ^らう^らあ^らみ^らう^らあ^らみ^らう^ら

てあまれば海濱の 実あひがいた親と
 子乃孫つまずぬ契とて 日丁そまき
 小今宵も けこ井さよあつて
 親子にあふと 何ちぞけ鐘の音ちて
 物粗ひ乃あそととおとがぬあー故なれを
 常乃契りもち別き此鐘とよひに

親子の為乃契りよハ鐘あよあ逢おあり
 嬉しき鐘此あつて かくて伴ひち改り
 親子此契りつまずせまも 富き其
 家と成よなり 実有難き孝行の 徳
 我目あいかまを

昭和九年六月廿五日印刷
昭和九年六月三十日發行

定價金五拾錢

東京市下谷區上根岸町八十二番地

著者 寶生新

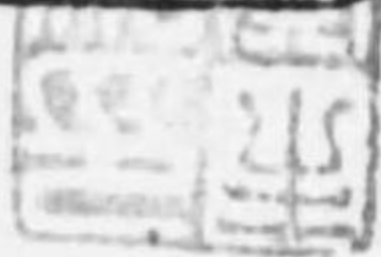
東京市京橋區銀座西六丁目三番地

發行兼印刷者 江島伊兵衛

發行所

下掛寶生流謠本刊行會

著作權所有



625

終

